

歴史から見たラテンアメリカのかたち：その3

—多様性に富んだラテンアメリカの世界—

渡邊利夫 *

【要旨】この稿では、ラテンアメリカがイスパノアメリカの他にカリブ海とブラジルからなる多様性に富んだ世界であることを説明する。ブラジルの文化はイベリア半島のポルトガルをルーツとしているが、自然環境、人種、歴史の違いからイスパノアメリカとは別の世界になった。スペイン語圏との類似性について筆者の体験を交えて語る。またカリブ海については、ヨーロッパの国際政治の影響を受け、その争いの中でイギリス、フランス、オランダなどの植民地になり、当時貴重であった砂糖の生産地になったことで、労働力としてアフリカ系黒人が連れて来られ、この地域特有のクレオール文化が生まれた。

キーワード：ブラジルの植民地史とその文化、植民地となったカリブ海の島、砂糖と黒人奴隸、クレオール文化。

* ラテンアメリカ・カリブ研究所上級研究員。1970年外務省入省、スペインを皮切りに米国、ブラジルを含むラテンアメリカ各国で勤務後、2010年から12年まで在ボリビア日本国大使。1986年ジョンズ・ホプキンス高等国際問題大学院(SAIS)留学。退官後南山大学などで非常勤講師。現在は先行研究に照らして現地で見聞した知識を整理する仕事をしている。本稿で示された見解は著者個人のものであり、ラテンアメリカ協会の見解を反映するものではない。正確を期したが、誤りがあれば筆者の責に帰す。

はじめに

コロンブスの「新大陸」到達以降、ラテンアメリカ・カリブの歴史は様変わりし、非常に多様性に富む世界になった。この論稿ではブラジルとカリブ海についての話をする。

その前に、コロンブスの到達によって旧世界の人々が受けた衝撃について少し語っておきたい。イギリスの歴史学者 J. H. エリオットは、コロンブスの「新大陸」到達と未知の民族との遭遇によって、「地理学や神学や歴史学や人間の本性について…多くの考え方へに変更を余儀なくされ」た、16世紀および17世紀初期のヨーロッパ人が受けた衝撃・驚愕や新世界をどう理解したらよいのかわからないという戸惑い、また「新大陸」がもたらした金、銀などの貴金属の流入が「価格革命」を起こし、ヨーロッパの資本主義勃興の起爆剤の一つになったばかりか¹、「ヨーロッパ人が必要とする生産物や物資の供給源とな」り、「新大陸」がヨーロッパの生産物の重要な市場になるなど、その経済的・社会的影響について述べている。あわせ、アメリカ大陸で新たに土地と資源を獲得したことにより、ヨーロッパ諸国間の勢力関係にいろいろな変化をもたらしたと指摘している（エリオット 1975 p.10）。新たな大国が勃興するこの時

代に「国力の源泉は、もはやヨーロッパ大陸のなかだけにあったのではなく、ヨーロッパ諸国の抗争の舞台も、これまでのヨーロッパの境界」「を越えて遙かに遠く離れた地域や海域」にまで拡大した（エリオット 1975 p.127）。

エリオットによれば、「新大陸」は17世紀になってヨーロッパの政治、外交、経済組織、思想体系のなかに組みこまれた（エリオット 1975 p.163）。このことを「新大陸」の観点から言えば、この稿で扱うブラジル、カリブ海もヨーロッパ諸国の植民地支配の中に組み込まれ、影響を受けるようになったということである。この論稿では、「大航海時代」が始まった時にブラジルがポルトガル領になったこと、奴隸を使つたプランテーション型の砂糖農業を興し発展の緒についたこと、ブラジル社会の特徴などについて語る。カリブ海については、列強が砂糖生産をしようと島の領有を巡つて熾烈な競争を展開した。その競争はヨーロッパの国際関係の影響をもろに受けたので、列強の旧大陸での戦争・勢力争いを考慮に入れながら、多国史の観点からカリブ海の歴史をみる。

この地域のことを理解するには、特に環大西洋世界を舞台とするトランサンショナルな関係を見る「アトランティック・ヒストリー」²という視点が重要である。また

¹ 「新大陸」のアメリカ銀がヨーロッパで「価格革命」を招いたこと、賃金上昇と物価上昇の時差からくる利潤が資本主義の発達を促したというアール・J・ハミルトンの説は良く知られているところである。しかしその考え方には未だ確認すべき色々な問題があるようである（エリオット 1975 pp.107-109）。

² バーナード・ベイリンは、価値観と文化を共有している今日の大西洋文明の基盤には、植民地時代、特に18世紀にできた大西洋地域の緊密な政治的、経済的、社会的関係よりなる「アトランティック・ヒストリー」があり、一つの新世界へと統合されたと述べている（ベイリンの『アトランティック・ヒストリー

カリブ海で旧世界とアフリカ文化の遭遇によって生まれたクレオール化現象についても述べる。

1. ポルトガル領植民地のブラジル

最初に海外に乗り出したポルトガル

さてここでポルトガルとスペインが海外進出を競い合っていた「大航海時代」に話を戻そう。どうしてブラジルがポルトガルの植民地になったかを知るために両国が海外進出の覇を競いあっていった時代から説明する必要がある。

15世紀に「大航海時代」が始まった時に、最初に海外に乗り出していったのはポルトガルであった。この国は、当時富の源泉と考えられていた金のアフリカルートを手にし、新興貴族の台頭という国内危機を乗り切るために、1415年にジョアン一世(治1385-1433)が北アフリカ北岸のセウタのイスラム教徒の要塞を攻めた。アヴィス朝(1385-1580)が海外に勇躍する嚆矢となった事件である。しかしイスラムの勢力が強大で、北アフリカ地域を支配下に置くことは犠牲が大きいので、ポルトガルはその勢力が余り及んでいない西アフリカ沿岸の発見と探検に乗り出した。

ポルトガルがスペインに先立って海外進出できた理由としては、①スペインより早い1249年に「レコンキスタ」を終え、国内で強い王権を確立できること、②王家が国家事業として海外進出に熱心であったこ

と、③大西洋に突出しているという恰好の地理的位置、④地理の知識と通商にたけたヴェネチア商人などの協力があったこと、⑤三角帆のカラヴェラ船の考案など15世紀後半の航海術の進歩があった(渡邊2021p.41)。

植民地ブラジルの誕生

コロンブスが「新大陸」に到達すると、海外事業に乗り出していたスペインとポルトガルとの間で領有する境界の問題が発生した。そこで両国はローマ教皇アレクサンデル六世(位1492-1503)の裁定を求めたが、それにジョアン二世(治1481-1495)が異議を唱え、両国の直接交渉の結果、1494年にポルトガル領ヴェルデ岬諸島の西370レグア(1レグア=約5.6km)を境界とする「トルデシーリヤス条約」が合意された。「インド航路」の発見によって、マヌエル一世(治1495-1521)はペドロ・アルヴァレス・カブラルの指揮で1500年2月に第二次インド船団を派遣するが、その船団がヴェルデ岬諸島を通過した後に大西洋を西に大きくそれ、4月に今のブラジル東北部バイア州の沿岸に到着する。ブラジル³の発見である。「トルデシーリヤス条約」を根拠にブラジルがポルトガルに帰属することになった。

こうしてブラジルのアマゾン河口にあるベレン付近から南部サンタカタリーナ州ラグーナ付近を通る子午線の東側がポルトガル領となった。実際の境界線は依然として

ー』を参照)。筆者は、多様な環大西洋地域諸国が現在でも価値観や文化を共有しているという考え方には賛成し難い。もっとも植民地時代に社会文化関係のベースが築かれたことは納得できる。

³ ブラジルの名は、沿岸部一帯に自生していた赤色染料の原料となる蘇芳パウ・ブラジル(ブラジルの木)に由来する。

曖昧のままであった。なおブラジルでは探していた金、銀がなかなか見つからず、金が見つかるのは 17 世紀末になってからである。ポルトガル王室はアジアと香料などの貿易の方に関心を持っていたために、当初ブラジルの開発は遅々としたものであった。それでもフランス人などの侵入もあって、1530 年にジョアン三世(治 1521-1557)はマルティン・アフォンソ・デ・ソウザを派遣し、植民地の防衛と開発に当たらせた。1534 年にカピタニア制⁴が採用された。土地の恩恵を受けたドナタリオは世襲制で、開拓を希望するカトリック信者に土地が分割、分与された(セズマリア制)。このカビタニア制は 1759 年、セズマリア制は 1822 年まで続き、巨大な大土地所有と地方で勢力を持つ家族が出現する原因になった(田尻 1999 p.17)。このラティフンディオ(大私有地)が 19 世紀になると南西部でコーヒープランテーションや大牧場になり、ブラジルの貧富の格差を生む。

ブラジルでは、1548 年に総督制が導入され、初代総督のトメ・デ・ソウザ(任 1549-1553)は東北部のバイア(サルヴァドル)を首府とした。高位の官僚にはポルトガル人を就けた。この時マノエル・ダ・ノブレガ神父等 6 名のイエズス会士がブラジルに来て、この国がカトリック教国になる。

ブラジル東北部の砂糖生産とそれを支えた奴隸

ヨーロッパで貴重品扱いをされていた砂糖がポルトガル領マデイラ諸島からブラジルに移植され、1526 年までにリスボンに輸出された(ミンツ 1988 p.85)。砂糖生産業の基礎は 1530 年代から 40 年代に確立した。イスパノアメリカと違って先住民が労働に不向きだったことから、ポルトガル人はアフリカ系黒人奴隸を輸入して砂糖を大規模に生産するプランテーション方式を採用した。この広大な大地を開拓するためには耕すことに向いた堅実型の人間でなく冒険型のポルトガル人の性格に合っていたようである(オランダ 1976 p.23)。彼らは労働を神聖視し仕事のために仕事をするというマックス・ヴェーバー流の考え方を持っておらず、肉体労働を嫌っていた。それにブラジルの広大な大原野を開拓するためにはこの奴隸制・大農場制の方が効果的であった。アフリカから「新大陸」に連れて来られた奴隸の総数は 1071 万人という。スペイン領アメリカ大陸・カリブ海に 529 万人、英領北米に 40 万人が輸入され、ブラジルには 486 万人であった(鈴木 2014 p.77)。ブラジルの奴隸解放はやっと 1888 年のこと⁵、一国としては世界最大の輸入国であった。

この砂糖を生産する大農園は一つの家父長的農村社会といえるもので、農園主はセ

⁴ 1534-36 年にジョアン三世はブラジルを海岸線に沿ってカビタニアという 15 の区画に分割し、ドナタリオ(受封者)という称号とともにポルトガルの 12 人の貴族に委譲した(東 1984 p.69)。

⁵ アメリカ合衆国で奴隸解放(1863 年)があって、巴拉グアイ戦争(1865 年-1870 年)帰りの黒人兵士や都市中間層出の将校が帝政に批判的で、奴隸の反乱鎮圧に抵抗した。内外世論の高まりやコーヒー生産に必要な労働力をイタリア系移民に見つけたことで、1888 年奴隸制を即時に無償で廃止する「黄金法」が公布された(山田・鈴木 2022 pp.87-101)。

ニヨール・デ・エンジェニョと呼ばれ、あたかも貴族のような存在であった。多数の奴隸が導入されたことがブラジル文化に大きな影響を与えた⁶。歴史の視点からブラジル人の国民性を語ったセルジオ・ブルケ・デ・オランダは、ポルトガル人によるカトリック教の伝道、ブラジルの熱帯自然の中で先住民、黒人、ポルトガル人との異種族混淆が進んだことが、ブラジル社会のルーツになったと述べている(住田 2022 p.24)。

スペインの支配下に入ったポルトガル

1580 年にポルトガルでアヴェス朝が断絶すると、スペインのフェリペ二世は母方の血縁を根拠に王位を主張し、ポルトガル王フィリペ一世(治 1581-1598)になった。ポルトガルはスペイン国王の統治下に入り、スペインから独立運動を始めていたプロテスタントのオランダと敵対する関係になった。フィリペ一世は 1580 年にポルトガルの港からオランダの船を締め出し、1598 年にはブラジルへ入港することを禁止した。

スペインとオランダとの休戦(1609-1621)が空けると、「西インド会社」⁷はブ

ラジルとの砂糖取引や奴隸貿易に直接乗り出した。そしてオランダは 1630 年からブラジル東北部のペルナンブコ一帯を占領した。この事態にポルトガルは自分達の領地であるブラジルを失しなったことでいら立ちを深めた。1640 年にスペインがカタルニアの反乱鎮圧のために重税を課し、徵兵を行ったことから、それに反発したポルトガル人はブラサンガ家のドン・ジョアンを押し立てスペインの里斯ボン駐在使節を追い出し、再独立した(1668 年の「リスボン条約」で承認)。そして 1654 年に独立でブラジルからオランダを追い出した。

なおこの時追い出されたオランダ人はカリブ海のキュラソー島などに移り住み、1667 年の「ブレダ条約」⁸により北米のニューアムステルダム(現在のニューヨークのこと)と交換にスリナムを手に入れ、そこにも移った。ブラジルの砂糖生産は多くをキリスト教に改宗した旧ユダヤ教徒に依存していたが、彼らが移住してしまい(安村 2022 p.45)、またオランダが貿易を牛耳っていたことから、ブラジルの砂糖生産は 1670 年頃をピークに遠のいていく。

⁶ 砂糖農園は、農園主が居住する大邸宅(カーザ・グランデ)、奴隸の住居(センザーラ)、精糖工場(エンジェニョ)などからなっていた。なお社会学者で文化人類学者のジルベルト・フレイレは、その人間関係が家父長的ながらも温情主義的、慈悲的になったのは、砂糖を生産する必要性から生まれたものであったと書いている(フレイレ、ジルベルト著『大邸宅と奴隸小屋』を参照)。

⁷ 新教徒の国オランダは、1568 年に始まるスペインから独立する「八〇年戦争」、その後英仏との度重なる戦争にもかかわらず、海外貿易、漁業、造船業、織物工業などで経済を発展させ、17 世紀に世界経済のヘゲモニーを握った。「西インド会社」は 1621 年に貿易会社を装って設立された私掠業の会社で、奴隸貿易を行った。ちなみにスペインと戦争している関係上支配下に入ったポルトガル経由でアジアの香辛料を輸入するのが難しくなったことから 1602 年に設立されたのが「東インド会社」である。各地に商館を作って輸入したばかりか、地域内の貿易も手広くを行い、莫大な利益を上げた。1799 年に破産した。

⁸ 17 世紀に経済的霸権を巡ってイギリスとオランダとの抗争が高まり、その内でイギリスが仕掛けた第二次英蘭戦争の講和条約が「ブレダ条約」である。

金の発見と内陸部に領土を広げるブラジル

他方で、特に産業もなく開発の遅れていたブラジル南部について言えば、16世紀中葉よりサンパウロ⁹で住民が先住民狩りや金の探索をする「バンデイラ」と呼ばれる奥地探検隊を盛んに組織した。黒人奴隸に代わる安価な労働力として先住民を求めたのである。1588年にはスペインの「無敵艦隊」に加わっていたポルトガル海軍が敗れ、奴隸輸送に支障をきたすようになると一層先住民の価値が高まった。「バンデイラ」は17世紀初めにはパラナ河畔に進出し、ルート上に幾つもの町を作った。彼らの意図しないこの行動が結果的にブラジルの国境を西に拡大することになる。彼らによって1693年にミナス・ジェライスで金(1727年にダイヤモンド)が発見された。すると、海岸部やポルトガル本国から内陸部の鉱山地帯への集団移動が起こる。ここでは砂金が川沿いや谷間の砂地から採集された。必要な物資は周辺地域から供給され、商業と運輸業が発展した。できた社会は砂糖の東北部とは違い開放的で、奴隸も休日に働いて金を貯めて自由な身分になることができた。東北部の大土地所有制とは違っていた。この地域で大地主が出現するのは18世紀の後半に採鉱方式が必要になり、金の生産量が減少に向かい、農牧を目指す者が増えてきてからである。また金の発見によって経済の中心が東北部から南部に移り、リオ・デ・ジャネイロ近くのパラティの港まで「黄金の道」が整備され、1763年に副王の首府がバイアからリオに移された。

スペインとの国境を画定するポルトガル

「バンデイラ」の活動や経済活動が南部に移ることによって、スペインとポルトガルの間で確定していなかった境界の問題が浮上した。「スペイン継承戦争(1702-1714)」を終わらせる「ユトレヒト条約」によって、ブラジルはラ・プラタ河岸のコロニア・ド・サクラメントの町を手に入れたが、アルゼンチンと国境を接することになり、境界で度々紛争になった。そこで両国は1750年に「マドリッド条約」を結び、その条約でポルトガルはブラジルの広大な地域を西に拡大した。その国境画定には「バンデイラ」が進めた「実効占」の原則が有利に働いた(山田・鈴木 2022 pp.54-56)。この条約でブラジルはコロニア・ド・サクラメントの町とラ・プラタ河の航行権を放棄する代わりに、イエズス会の教化村が多数あるミシオネス地方を手にした。それでも「七年戦争(1756-63)」でスペイン軍がアルゼンチンからブラジル南部を侵攻するなど境界紛争は続き、ポルトガルは1777年の「サン・イルデフォンソ条約」(未批准)によってコロニア・ド・サクラメントとミシオネス地方をスペインに返還する代わりに、「マドリッド条約」で認められた西と北の境界線を維持することになった。なお今日のような最終的な国境の確定には、19世紀のウルグアイの独立、「パラグアイ戦争」まで待たねばならない。

ポルトガル文化が基調のブラジル

このようにブラジルという国はポルトガ

⁹ サンパウロは、1554年にイエズス会がサンヴィセントから少し内陸に入ったピラチニンガ高原に町を建設したのが始まりで、この地はティエテ川などの河川水系が利用できるという利便性を持っていた。

ルの植民地として始まった。その歴史的経緯もあってポルトガル文化が基調になっている。そのポルトガルであるが、この国は11世紀末にカスティリヤ=レオン国王のアルフォンソ六世(治 1065-1109)がイスラム勢力との戦いで劣勢を挽回するために、娘テレサをフランスのブルゴーニュ地方の有力貴族であるアンリ・ド・ボルゴーニュと結婚させ、彼にモンデーゴ川以北のポルトゥカーレ伯領、コインブラ伯領の経営を委嘱したのが始まりである。ポルトガル、スペインの両国は、ヨーロッパと中東・アフリカを結び民族、文化が移動する橋渡しをするイベリア半島に位置し、長い間歴史を共有してきた。紀元前2世紀に侵入しこの地をヒスパニアないしイスパニアと呼んだローマ、5世紀から支配した西ゴート王国の時代から同じ文化圏にあった。その後711年からイスラム勢力の支配が長く続いた。その共有する文化が「新大陸」に移植されたことから、ブラジルとイスパノアメリカの文化が似通っていたとしても不思議ではない¹⁰。それは、王権を頂点とする封建主義、大義を前に服従は規律の基礎であるとしてカシケ(頭領)に従う社会風土、法、契約という中立的な行政制度よりも人間関係を大切にする気風、ローマ帝国時代に始まったカトリシズムを理念とする保守的な「キリスト教的一体性」(=反ユダヤ主義)、法治主義に代わり属人的な官僚統治、奴隸を含む多民族社会、個人の人格・美德や自尊心・独立性を重んじ、時には団結が害され

ることも辞さない気風(オランダ 1976 p.3)などである。

ブラジル社会の特徴

—イスパノアメリカとの比較で—

ところが「新大陸」では、スペイン語とポルトガル語という言語の違いばかりでなく、植民地として異なる歴史、多人種、多民族社会であること、自然環境・風土の違いなどで、ミクロの世界では違いがある。筆者の経験からそれらをここでまとめてみた。

①植民地時代の主産業はスペイン領が銀、ブラジルは砂糖

スペイン領アメリカでは、植民地時代銀鉱山を中心とする収奪型の経済ができた。南米大陸では、鉱山は高度のあるアンデス山脈で見つかった。またこの地域はインカ帝国があったところで、スペイン人は先住民を労働力として農業、鉱業で利用できた。そこで彼等は、鉱山近郊の町、本国への積み出し港、港までの輸送ルート上に整然とした街並みの都市を作って住んだ。それを越えて東、つまり急峻な山を下ってブラジル側に進出するようなことは余りなかった。そのおかげでブラジルの「バンデイラ」が西に領土を拡大できたともいえる。

他方ポルトガル人は金銀がなかなか見つからなかったことからブラジル東北部で砂糖農園を興した。町は主に輸出に便利な海岸部にできた。現在でも大きな町は海岸部にある。少し内陸に入ったところにある大

¹⁰ 近世までのスペインとポルトガルの歴史が共通する部分が多いとはいえ、それが親密であるということを意味しないようだ。ポルトガルは歴史的にスペインから常に圧力を受けてきたからか、スペインに対する国民感情は今でも良くない。

莊園は、白人の農園主を中心とする一つの共同体・社会で、植民者達は散村の生活を楽しんだ。ポルトガル人にとって都市は生活の場ではなかった。内陸部である「奥地」が発展するのは、南部で「バンディラ」がミナス・ジェライス地方で待望の金を見つけ、大規模な内国移住が始まってからである。

②アフリカからきた黒人奴隸と多人種の混血社会

ブラジルはヨーロッパから移住してきた白人、アフリカ系黒人、先住民、東洋系などから成る混血の多民族国家・社会である。もともとブラジルにはトゥピー語族の先住民が広く住んでいたものの、密度が低く、狩猟採取を生業にし、国家を形成していなかった。植民に際し多数の先住民が殺された。彼らは拘束を嫌い労働に慣れていなかった。砂糖農園の生産形態は多数の労働者を必要とするプランテーション型であったことから、16世紀初頭からアフリカより連れてこられたのが黒人奴隸である。

奴隸はポルトガル人の貿易業者がコンゴ、アンゴラ地域からブラジル東北部やリオ・デ・ジャネイロなどに陸揚げした。ポルトガル人には黒人と交わることに対する抵抗感がなかった。その結果ブラジルではアフリカ系黒人との人種的混血があり、文化的融合クレオール化が進んだ。ブラジルの東北部を中心とするこのクレオール化現象は、下記する環カリブ海地域とよく似ている。そしてアンゴラ系カンドンブレやウンバン

ダのアフロ・ブラジル宗教が生まれた。またアフリカ系宗教の儀礼において神格を呼び出すために演奏される多様なリズムがブラジル音楽の基盤の一つにもなった(旦 2022 pp.68-69)。先住民文化と融合した形態もあるが、海岸部で盛大なカーニバルが行われ、黒人文化と融合した。カリブ海に近いものを見る。またアフリカ原産の黒目豆をすりつぶしたアカラジエ、隠元豆、豚の脂身、牛肉の干し肉などを良く煮込んだフェジョアーダ、赤いヤシ油とココナッツミルクを使うムケカなどの食文化が生まれた。

③ブラジルの多様な自然と人々の大国意識

南北大陸をまたいでいるスペイン領アメリカは植民地全体としては広大で多様な世界といえるが、一国単位で見るとブラジルの大陸性と多様性は際立っている。ブラジルは南米大陸の約半分を占めている。この国は5つの地方と文化¹¹、感覚的には国からなる大陸国家である。国内で自己完結できるほど豊富な資源や食料も持っている。そこでブラジルでは、地域よって人々の生活スタイルに大きなばらつきがあり、「大国意識」が強く、人々の意識する時間はゆっくりとしたリズムで流れている。この広大な大地によって、少々のことでは物に動じず、儀式ばらずに気さくで鷹揚な「ブラジル人」気質が養われた。この大陸気質はスペイン語圏世界よりブラジルの方がはるかに強く、島国で小国日本人にはなかなか

¹¹ ブラジルの人類学者ダルシー・リベイロは、東北部の砂糖農園を中心に展開したクリオウロ文化、サンパウロを中心にコーヒー大農園、工業化へと産業が発達した地域のカイピーラ文化、東北部の乾燥地帯から中西部のセラードに及ぶセルタネージョ文化、ゴムとともに発展したアマゾン地方のカボクロ文化、南部地方平原に広がった牧童のガウーショ文化の5文化圏をあげている(三田 2022 p.107)。

か理解し難い。しかしそこが好きだという「ブラキチ(狂)」も多い。また植民地時代の家父長制の名残からか、血と心の結びつきを大切にする家族主義がスペイン語圏より強く残っている。

④ブラジル国民のアイデンティティ

ブラジルで、植民が始まった後3、4世紀の間の人々の生活は、ポルトガル文化の伝統が強い東北部の大農園を中心に行われて、家父長的なものであった。その後この伝統が長く続いた(オランダ 1976 p.60)。

ところがミナス・ジェライスで金が見つかり、18世紀後半からサンパウロ地方でコーヒー生産が増加し、外国人移民が多数流入すると、東北部の農村社会から南部の都市経済が中心になった。するとますます多民族、多人種社会になり異文化の融合とアイデンティティの形成が難しくなった。人種・民族や自然環境の多様性こそブラジルのアイデンティティの本質ではないか考える者もいる。

これに対しスペイン領植民地は、人種の数が限られており、メソアメリカ、アンデス山脈地帯など先住民が重きをなす地域では、先住民との混血化が進んだ。早くも16世紀から大学の設置と印刷機の導入が行われ、イエズス会などによる先住民に対するキリスト教と教育の普及が図られた。そのおかげであろうか、国民のアイデンティテ

ィの形成はブラジルより容易であったと言える。

2. ヨーロッパ列強によるカリブ海の島の植民地化とクレオール文化

カリブ海地域とは

それでは西半球で一つの世界を作っているカリブ海地域について語る。ここは、植民地時代スペイン領アメリカ大陸へ向かうための玄関口、すなわち必ず通らなければいけないことからボカ(スペイン語で口の意)と言われた。海流がメキシコ湾を南米大陸北岸から北米大陸南岸に向け時計回りに流れているので、このルートが帆船の航路になった。この地域の島と沿岸は船でアクセスが容易であったことから、大陸部と比較して防衛が難しく、ヨーロッパの新興国による略奪や侵略を受けて、多数の島がこれらの国の植民地になった。

カリブ海地域とは、非独立国を含め「西インド諸島」(大・小アンティリヤス諸島¹²⁾とカリブ海を取り囲む大陸の沿岸地域を指す¹³。狭いながらも地理、地形、自然環境が非常に多様な地域である。この地域は先住民、ヨーロッパ系白人、アフリカ系黒人、インド人、ジャワ人などの多人種・多文化社会で、人種的・文化的混血が進み、大陸部とは違う世界を作っている。

¹² フランス人やオランダ人は15世紀のポルトガルの海図にあった仮想の島「アンティーリヤ」にちなんでここを「アンティリヤス諸島」と呼び、英語圏では「西インド諸島」と呼ばれている。

¹³ この環カリブ海地域には、島嶼国が13カ国、南米大陸北岸にガイアナ、スリナム、中米地峡にベリーズがある。その他にヨーロッパ諸国の海外領土として南米北岸の仏領ギアナ、マルティニク、グアドループ、サンマルタン島、米領プエルト・リコ、ヴァージン諸島、蘭領アルバ、キュラソー、ボネール島、シントマールテン島、シントユースタティウス島、サバ島、英領のタークス・カイコス諸島、ケイマン諸島、ヴァージン諸島、モントセラト、アンギラがある。

なおこの論稿では、通常イスパノアメリカに含まれるキューバ、ドミニカ共和国を除く、主にイギリス、フランス、オランダなどヨーロッパ列強の旧植民地、奴隸制を経験した島を対象に書いている¹⁴。インド系が多いトリニダッド・トバゴとガイアナ、ジャワ人の多いスリナムを除きアフリカ系黒人が9割前後を占めているという特徴がある。その歴史からブラジル東北部と似た雰囲気がある。

跳梁するカリブ海の海賊

カリブの海と言えば、我々はデズニーメイクの海賊のことを思い浮べる。スペインが「新大陸」を植民地にすると、自国以外の国が交易することや新キリスト教徒などが入り込むことを禁じた。しかし本国からの商品供給だけでは到底植民者の需要をまかなうことができず、スペイン以外の国の商人たちが禁を犯して密貿易をした。住民の方でもこれを歓迎した。ところが16世紀にこれらの自由な交易者の中からバッカニア¹⁵と呼ばれる海賊になるものがあらわれた。彼らにとり「トルデシーリヤス線のか

なたの平和」などなかったのである。

ここで近世になって海賊活動を始めた新興国のイギリス、フランスについて語りたい。両国は14世紀半ばに黒死病や飢饉に苦しみ、「百年戦争(1339-1453)」を戦った。戦争が終わってもイギリスで王朝の争いである「ばら戦争(1455-87)」、フランスでは大領主間の争い、シャルル八世(治1483-1498)が始めたイタリア侵略(1494-1559)とハプスブルク家との覇権争い、新旧の宗教対立である「ユグノー戦争(1562-98)」で確固とした王権を築くことができなかった。それでも15世紀末にイギリスでテューダー朝を開いたヘンリ七世(治1485-1509)、フランスでブルボン朝を開いたアンリ四世(治1589-1610)の時代になると、漸く確かな王権が生まれる状況になった。

カリブ海がスペイン領植民地から金、銀の富を本国に送るための航路で、狭いメキシコ湾を通らざるを得なかったことから、スペインの防衛を潜り抜けて、16世紀前半から¹⁶フランスの私掠船¹⁷が財宝を目当てにうごめいた。これらの船は時に国家を後ろ盾にして略奪行為を行った。それが激し

¹⁴ スペインが植民地政策として混血化を積極的に推奨し、また国民感情としても抵抗感がなかったことで、長く間スペイン領であったキューバ、ドミニカ共和国では混血メスティソの比率が高い。他の島嶼国とは文化的に一味違う。この稿では両国を除く主に大・小のアンティリヤス諸島を念頭に置いて書いている。もっとも両国も多分にクレオール性という点で共通する部分を持っている。

¹⁵ 「新大陸」の玄関口にあるエスペニョーラ島(現在のドミニカ共和国とハイチ)に住みついたならず者たちは、狩猟を生業とし、肉を塩漬けにして乾燥させて食べていたが、それを乾燥させる場所をブカンと呼んでいたことから、この地域では彼らのことをブカニエ、またはバッカニアと呼んだ(ゴス 1994 p.192)。

¹⁶ 1522年にアステカ帝国を征服したエルナン・コルテスが本国に送ったモクテスマ二世の財宝を、フランス人のジャン・ド・フレリの指揮する私掠船がアソーレス諸島の近くで略奪したのは象徴的な事件である(コーディングリ 2000 p.25)

¹⁷ 私掠船とは、原則として戦時に委任状(または通称拿捕許可状)によって敵性国商船を拿捕することを認められた武装船・乗組員のことで、彼らは平和になると海賊になることが多かった。

くなるのは、1552 年にスペインのカルロス一世とフランスのアンリ二世(治 1547-1559)と間でイタリアを巡る争いが再燃してからである(エリオット 1975 p.146)。フランスの海賊達は金、銀を狙ってカリブ海を荒らし回った。その海賊もフランスがイタリアに対する権利を完全に放棄した 1559 年の「カトー・カンブレジ和約」でスペインと和平してから下火になった。

他方イギリスの海賊が跳梁するようになるのは、フランスという共通の敵に 1489 年の「メディナ・デル・カンポ条約」で生まれたスペインとの友好係が、ヘンリ八世(治 1509-1547)の「カトリック両王」の娘のキャサリン・オブ・アラゴンとの離縁と 1533 年にローマ教皇から破門されたことで険悪化してからである(増田 1989 pp.44-51)。エリザベス一世(治 1558-1603)時代の 1568 年にジョン・ホーキンズによりメキシコ湾岸ベラクルス港にあるサン・ファン・デ・ウルア砦を攻撃したのを嚆矢に(ペンローズ 1985 p.218)、ホーキンズやフランシス・ドレイク等がスペイン帝国の力を削ぐために奴隸売買や海賊活動を行った。イギリスは「植民帝国こそがスペイン経済力の根源である」(エリオット 1975 p.149)と考えていたからである。ドレイクは 1572 年にパナマ北岸の港町ノンブレ・デ・ディオスを襲撃し、1573 年にカリブ海の南米大陸北岸を荒らし回った。1586 年にもサント・ドミンゴ、カルタヘナの町を略奪した。なお彼は 1577 年から 1580 年

に地球を一周し、1588 年に副司令官としてスペインの「無敵艦隊」を破った大立者の一人だったことで知られている。

1568 年にスペインから独立運動を始め、17 世紀にかけてバルト海、東アジア、「新大陸」との中継貿易や海運、造船、漁業、織物業により繁栄したオランダの「西インド会社」が 17 世紀の第 2・4 半期にカリブ海で海賊行為、砂糖貿易、密貿易を盛んに行なった。1628 年にピート・ハインがキューバのマタンサス港でメキシコからの財宝を積んだ銀船隊を拿捕したのは有名である。フェリペ三世(治 1598-1621)の時代にアンダルシアなどから追放された「モリスコ」¹⁸がモロッコのサレ(ラバト近郊の港町)やアルジェリアを基地にスペイン近海で「新大陸」からの財宝を積む帰船を襲った。

17 世紀、落日のスペイン

フェリペ二世時代のスペインは「新大陸」の銀で豊かになったが、新教徒のオランダが独立を求めて起こした「八〇年戦争(1568-1648)」、オスマン・トルコとの戦い、アルマダ艦隊の壊滅的な敗北(1588 年)、宿敵フランスとの争いなどで国力を消耗した。その後スペインはフェリペ四世(治 1621-1665)時代の 1621 年にネーデルラントとの休戦が終わると戦争を再開したばかりか、プロテスタントの貴族が起こしたドイツ(神聖ローマ帝国)を舞台とする「三〇年戦争(1618-48)」に干渉し、その最中の 1639

¹⁸ スペインの「カトリック両王」は 1492 年に国内のユダヤ教徒を追放した。イスラム教徒については、カスティリヤ王イサベルが 1502 年に追放し、カルロス一世が 1526 年にアラゴンからも追放した。国内に残った者は改宗者「モリスコ」になった。

年にフランスがカタルーニャに侵入し、住民が反乱を起こしポルトガルに支援を求めたことがきっかけで「同君連合」が瓦解した。1643年の「ロクロワの戦い」¹⁹ではオランダに味方するフランスに大敗北し、「ミュンスター講和条約(1648年)」でオランダの独立を認めた。1649年のペスト禍による人口の減少、17世紀中頃から海運業の衰退、16世紀末をピークにメキシコ、ペルーから銀の流入量と国王税の減少(近藤2011 p.120)なども加わって一層国力を消耗した。

スペインは「三〇年戦争」後もフランスと戦争を続けていたが、1659年の「ピレネー条約」で講和し、カタルーニャの領土の一部を割譲するとともに、フェリペ四世の長女マリア・テレサをフランスのルイ十四世の妃として嫁がせた。そして18世紀初めに、ルイ十四世は故妃がカルロス二世(治1665-1700)の腹違いの姉であることを口実に、孫のアンジュー公フィリップを後継王に推すと、ヨーロッパ中を巻き込む「スペイン継承戦争(1701-1714)」になった。その結果1713年の「ユトレヒト条約」で、フェリペ五世(治1700-1724, 1724-1746)を始祖とするブルボン朝が発足した。

カリブ海の植民地化争い

この稿の冒頭で、環カリブ海地域にはヨーロッパの旧植民地であった多数の国(一部は宗主国の海外領土)があると述べた。どうしてこのような状況になっているかを

理解するためには植民地時代にまでさかのぼる必要がある。

「新大陸」がスペインの植民地になると、オランダ、イギリス、フランスの新興国はこの地域で海賊活動を行ったばかりか、17世紀からスペインの勢力が及んでいない北美大陸東部や「西インド諸島」で植民地獲得に乗り出した。スペインがよく防衛するだけの力を持っていた間は良かったが、国力が衰えると、もはやカリブ海で支配権を維持できなかった。するとカリブ海は列強の領土争いの舞台となった。というのも、この地域がブラジルで大々的に生産されていた砂糖のもう一つの生産地になったからである。カリブ海は気候的に砂糖の栽培に適していた。ちなみに砂糖キビはコロンブスが第二次航海でスペイン領のカナリア諸島からエスピニョーラ島に持ち込んだ。1516年にゴンサロ・デ・ベドーサが最初の製糖工場を建設した(ウィリアムズ1978 p.18)。ところがエスピニョーラ島の砂糖業は16世紀後半になると衰退した。スペインの植民者が銀を求めて大アンティル諸島からアメリカ大陸に渡っていったのが原因と推測される。

この砂糖のカリブ海でまず勢力を伸ばしたのは、スペインによる新教徒の弾圧に抗議して独立運動を始めたオランダである。この国は1590年頃より海外貿易に関心を持ち、中継貿易、海運業、魚業などで経済を発展させた。当初は東アジアに関心を向けていたが、その後砂糖を作っていたブラジル

¹⁹ 「ロクロアの戦い」とは、ルイ十四世が4歳で即位したばかりの1643年5月に、「三〇年戦争」で南ネーデルラントからパリに向かったフランシスコ・ダ・メルロの率いるスペイン軍がフランス軍に大敗北した戦いである。

東北部やニシンの塩漬に必要な塩を求めて南米北岸、カリブ海にも目を向け、キュラソーなどいくつかの島を領有した。ところが 1652 年から始まる三次にわたる英蘭戦争、フランスの侵略、周辺国との経済競争に敗れて大国の座から滑り落ちた。

その後はフランスとイギリスの勢力がこの地域で台頭する。ところがヨーロッパの政治はなかなか安定しなかった。フランスで貴族の「フロンドの乱(1648-1653)」を押さえ込んだ「太陽王」ルイ一四世(治 1643-1715、1661 年から親政)が相続権を主張してスペイン領ネーデルラント戦争やオランダに対する侵略、神聖ローマ帝国内のプファルツ選帝侯領の継承を巡る「アウクスブルク同盟戦争」を起こした。18 世紀になっても「スペイン王位継承戦争」、「オーストリア継承戦争(1740-1748)」などが起こり、戦争になる度に英仏は北米大陸やカリブ海で領土の争奪戦を続けた。

やっと 18 世紀後半になって「七年戦争(1756-1763)」、アメリカ独立戦争(1775-1783)、フランス革命・ナポレオン戦争を経てカリブ海の島の領有の構図が固まった。オランダは南米大陸北岸のスリナムとキュラソーなどの島、スペインは大アンティル諸島の植民地を維持したものの、いち早く 18 世紀後半から産業革命を経験し経済を発展させて「財政・軍事国家」になったイギリスが優位に立ち、「西インド諸島」で大

半の 10 島を領有した。英仏による島々の争奪戦については、読者には少し細かすぎると思われる所以、文末の付論にまとめておいた。

砂糖生産とアフリカ人奴隸

スペインが「新大陸」で探し求めたのは金、銀であった。ところがエスパニョーラ島で 1520 年代まで金がとれたが、その後生産量が急激に減少した。スペインは小アンティル諸島などには目もくれなかった。ところがこれらの島が砂糖生産で宝の島になるからわからないものである。カリブ海の砂糖生産は 17 世紀半ばから英領バルバドスで始まり、仏領グアドループ、マルティニクに広まった。これらの島を領有したイギリス人、フランス人達は、当初白人奉公人²⁰、黒人奴隸、家畜を使ってプランテーションという経営方式で粗糖、糖蜜、ラム酒を作り、大きな利潤を得た。ところが砂糖生産には大量の労働力が必要であった。先住民が厳しい労働と疫病で急速に人口を減少させていたことから、白人労働者だけでは間に合わず、アフリカ奴隸を輸入した。

最初にこの地域に植民したスペイン人にとって、奴隸を使うのは 13 世紀の『七部法典』²¹にも謳われるなど、馴染みのある社会的伝統であった。これはヨーロッパの一般認識でもあった²²。スペインは 1501 年に土着民に代わる労働力として本国から

²⁰ 白人奉公人とは、債務による年季奉公人とか、ちょっとした犯罪者、政治・宗教上の反体制派、アイルランドの革命運動家、戦争捕虜、労働活動家、単に誘拐された者などのことである(ミンツ 1988 p.119)。

²¹ アルフォンソ 10 世(治 1252-1284)が編集した法令集である。

²² 「先天的奴隸人」を唱えるアリストテレス以来の西洋哲学では、人間と獸がまじり合ったような生来の能力がない者は、奴隸になんでも仕方がないと考えていた。奴隸は「新大陸」で遭遇した先住民と扱いが違った。

キリスト教徒のニグロ奴隸、1528年からは上納金を払って奴隸貿易の独占権を与えるアシエント制により西アフリカのポルトガル領植民地から奴隸を連れてきた。奴隸は最初個人や団体に独占的許可状が与えて輸入されたが、1580年にフェリペ二世がポルトガル王になると、インディアス各地に確実に奴隸を届けるために1595年から1640年まで請負制度(アシエント制)になり、ポルトガル人に権利を与えた。その後オランダが西アフリカのポルトガル領の奴隸基地エルミナを1637年に、アンゴラを1648年に奪い、「西インド会社」が奴隸貿易を行った。オランダ人は1654年にブラジルから追い出されても、1661年にポルトガルとの和平条約によって西アフリカ全域で奴隸貿易を行うことを認められ、1640年から1692年までの半世紀の間、奴隸貿易を大々的に行つた。また彼らが小アンティル諸島のイギリス人やフランス人植民者に砂糖の栽培法と製糖法を教え、資本を提供了。

イギリスはオランダが支配する奴隸貿易になかなか入り込めなかつたが、王制復古後の1672年に「イギリス王立アフリカ会社」が独占的特権を認めるチャターを得て奴隸貿易に割つて入り奴隸を供給した。1698年に奴隸商人も手数料を払つて参加できるようになったが、「ユトレヒト条約(1713年)」の付帯条約で30年間の「黒人請負契約に関する条約」を結ぶと、「南海会社」が独占的にスペイン領アメリカへの奴隸輸入を行い、ジャマイカとバルバドスを奴隸の集配基地にした(メジャフェ 1979 pp.80-81)。

英国は1655年にジャマイカを植民地に

すると、ここをヨーロッパの砂糖ブームによって18世紀にかけて英領カリブで最大の砂糖産地にした。ここでの砂糖生産は1774年がピークであった。他方フランスはグアドループ、マルティニクばかりでなく、スペインからハイチを譲渡されると(1697年)、そこを砂糖生産の基地にした。イギリスがアメリカ独立戦争でジャマイカから米国への砂糖の輸出を禁じたおかげでハイチの生産量が伸びた。ところがここもハイチ独立闘争(1791-1804)でインフラが破壊された。キューバでは「七年戦争」時のイギリスによるハバナ占領が契機に砂糖生産が盛んになり、19世紀後半から世紀転換期にかけてアメリカ合衆国の投資もあって輸出が大いに伸びた。ドミニカ共和国の砂糖生産はキューバの「第一次独立戦争(1868-1878)」で逃ってきたキューバ人達が大規模化した。

砂糖生産が伸びるとともに奴隸の数が増加した。1886年のキューバを最後にこの地域の奴隸制が禁止されるまで、小アンティリヤス諸島、ジャマイカ、エスピニョーラ島、キューバ、プエルト・リコ、カリブ海沿岸部に輸入された奴隸の数は529万人とも言われる。その結果奴隸制廃止後に移住してきたインド系住民の多いトリニダード・トバゴ、ガイアナ、そしてスリナム(インド系に加え旧オランダ領であることからジャワ島系移民も多い)、混血やヨーロッパ系のメノナイト信徒が多いベリーズ、混血の多いドミニカ共和国、キューバ、セントビンセント・グレナディーンを除き、アフリカ系の人口が8割以上を占めている。

大西洋をまたぐ「三角貿易」

コロンブスの「新大陸」到達によって、ヨーロッパとカリブ海との間に大西洋という東と西を結ぶ「途切ることのない連絡路」ができた。この交通の道はその後アフリカ大陸をも結びつけた。植民地時代の「新大陸」では、ヨーロッパ各国の海賊や貿易商が盛んに密貿易をし、カリブ海で砂糖を生産する島を領有したので、大西洋経済圏ができた。そうした中で生まれたのが通称「三角貿易」である。

「三角貿易」とは、輸入したインド産の綿布や国産の金属製品、銃器などを積んでヨーロッパより出航した船がアフリカ西海岸で奴隸という商品と交換する。これが三角形の一辺である。第二辺はいわゆる「中間航路」と言われるもので、西アフリカから「西インド諸島」などへの奴隸の移送である。最後の一辺は貿易船が奴隸との交換により受け取った砂糖、ラム酒、その他のカリブ海地方の物産をヨーロッパに持ち帰る航海で、これで三辺ができあがる。この「三角貿易」の核はもちろん「中間航路」の奴隸貿易であった。

「西インド諸島」はヨーロッパにとって鉄、火器、真鍮、ワインなどの市場になった。1697年には「三角貿易」がイギリスの総輸入のほぼ10%、総輸出でも4%以上を占めた(ウィリアムズ 1978 p.180)。そして英領「西インド諸島」からイギリスの輸入(1714-73年)は、北米大陸植民地からの

それに比べて約2倍、輸出は65%というシェアであった(同左 p.193)。フランスの場合、アンティル諸島が貿易全体の6分の1を占めた(1715年)。小さな島の幾つかを失ってからも、その3分の1がこの地域との関係であった(同左 p.195)。「三角貿易」はイギリスのブリストル、フランスのボルドー、ナント、ラ・ロシェルの町を発展させ、イギリスのリヴァプールやフランスのナントの精糖業、繊維場、海運業と造船業を促進し、生まれた膨大な利潤は本国の産業に再投資された。このように今では信じ難いことであるが、この時代ヨーロッパにとって「西インド諸島」はそれほど経済的に重要であった。

アフロカリブが生んだクレオール文化

こうした歴史があって、この地域に強制的に拉致され出身地域の言語や文化を捨てさせられたにもかかわらず奴隸が持ち込んだアフリカ的なものが、ヨーロッパの文化との接触、混淆によって生まれたクレオール文化がある²³。それは、単なるアフリカ文化がヨーロッパ文化と混交融合したというだけではなく、カリブ海という新しい環境に適応しつつ、相互に影響を及ぼし合う中で生まれたもので、創造的な文化変容である(長嶋 1991 pp.96-97)。

このクレオール文化は、音楽、呪術、フォークロア、宗教において特にアフリカニズムが強い(長嶋 1991 p.97)。それはサハ

²³ 今日カリブ海地域で使われているクレオール(仏語)という言葉は、一般にヨーロッパの旧植民地の国・地域で、黒人奴隸のアフリカ文化と混交することによって生まれた特有の現象、人、言語、物などの産物、「現地もの」としての文化一般を意味している(クレオールの語源と変遷については中村隆之を参照[中村 2017])。なお類似語にイスパノアメリカのクリオーリョ(ブラジルではクリオウロ)があるが、これは「植民地生まれの白人」を意味する。

ラ以南のアフリカから奴隸とともにたらされた拍節の強弱のパターンを変化させて独特の効果を出すシンコペーション、呪術的なリピート、それらが宗主国文化と混じって生まれたアフロカリビアン音楽、ダンス、仮装などである。ジャマイカのラスタファリ、レギエ、トリニダードのカリプソとインドのリズムを取り入れたソカも影響を受けている。ルンバ、サンバ、マンボといったラテンのリズムは、アフリカの影響を受けて素朴で土着的な芸術であるアフロカリビアン音楽が基調になっていると言われる。また西欧の「歴史的暴力」を背負いながらカリビアン・アイデンティティを模索する「クレオール文学」も20世紀になって盛んになってきた。1992年にデレク・ウォルコットがノーベル文学賞を受賞した。トリニダードなどカリブの島で毎年1月から3月に行われ、西アフリカ文化が混じるカトリック教徒のお祭りであるカーニバルも有名である。いまは飲めや唄え、踊れの世俗的な祝祭になっている。その他にもはや優位を占めているとは言えないまでも、文化的に依然重要なのが、諸信仰、儀礼、妖術、「呪術」である。またキューバのサンテリア、ハイチの民間信仰で

あるヴードゥー²⁴などがある。また植民地の住民、特に黒人が話す言葉として、それぞれ異なる母語を持つ人々どうしの意思疎通のために、ヨーロッパの言語を単純化して生まれた幾つものクレオール語(ハイチでは母語)がある。

今でも宗主国の痕跡を残す政治

強制的に連れて来られた黒人奴隸は、砂糖プランテーションで働かせられた。そこでは「人種的従属と不平等の原理」が支配していた。それは支配階級である少数の白人、それに続く白人奉公人、黒人と白人の混血ムラート、多数の黒人奴隸という堅固なピラミッド型社会であった。奴隸制度は1833年に英国(従って「西インド諸島」)で廃止されたものの、現在でもこの地域は人口数的には1割に満たない白人が経営するプランテーションの集合体でできあがったような社会で、奴隸制時代の社会構造の原理が継承されている(長嶋 1991 p.88)。それでも近代になると黒人の人権、自立、地位向上を求める様々な政治運動が起こり、アフリカ系の人々の意識が高まってきている。しかしカリブ地域はインド人、中国人、ジャワ系など人種的・宗教的に多様な社会

²⁴ サンテリアは、西アフリカのヨルバ語族の宗教をベースにしてキューバで生まれた新しいクレオール宗教のことで、キリスト教の聖職者が用いた蔑称である(キューバのクレオール宗教については、越川芳明の『カリブ海の黒い神々』を参照)。ヴードゥー教は独特の太鼓のリズムに合わせた踊り、儀式により、数多い精霊との交流(憑依すること。すなわち聖霊が人に乗り移ること)によって病気など個人や共同体の抱える問題を解決し、社会生活を理想的なものにする、ハイチで主に貧しい農民や都市の下層階級に信じられている民間信仰で(佐藤 2003 p.67)、中部・西アフリカを起源とし、ハイチでキリスト教と習合し、再構築された宗教である(ヴードゥーについては、佐藤文則の『ダンシング・ヴードゥー ハイチを彩る精霊たち』を参照)。

で、政治的理念や利害の対立がある、人種・宗教・文化を紐帶とする連帶の形成は難しく、まだ共通のアイデンティティというようなものは生まれていない(松本 2017 pp.102-105)。それでも、ともにヨーロッパ諸国の奴隸制や植民地経営による「負の遺産」を持つという共通項とこの地域が共有する歴史と文化が植民地主義と島国根性を乗り越え、人々を結び付けているのは事実である。

まとめ—ブラジルと環カリブ海諸国との世界とは—

アメリカ合衆国とカナダを除く「新大陸」のラテンアメリカ・カリブの世界は、スペイン語圏のイスパノアメリカ、ポルトガル領であったブラジル、環カリブ海諸国という3つの世界で構成されている。

筆者は、ブラジルは隣り合わせのイスパノアメリカの社会、文化と違うところよりも類似している点が多いのではないかと感じている。というのも、ブラジルはイベリア半島でスペインと文化を同じくするポルトガルを母国とし、その植民地時代が長く続いたからである。もちろんミクロの視点ではイスパノアメリカとブラジルでは違うところも多々ある。それは自然環境、人種・民族、辿ってきた歴史の違いなどからきている。またブラジル東北部に砂糖生産のために多数のアフリカ人奴隸が連れてこられ、その後旧大陸からの新規移民が加わって多民族・多文化社会になったこと、広大な国土と多様な自然環境の影響が大きいように思われる。これらの条件が多様な社会で、大陸気質や大国意識という人々のメ

ンタリティを作っている。それでもイベリア半島の共通の文化をルーツとしていることからブラジルとイスパノアメリカは、違いよりも、類似性やラテンアメリカ世界の一員として仲間意識の方が勝っており、現在でも強い連帶感で結ばれている(詳細は渡邊 2021 pp.138-144 を参照)。

これに対し、旧スペイン領であったキューバとドミニカ共和国を除く環カリブ海諸国とイスパノアメリカとの違いは、ブラジルの場合より大きいように思われる。というのも、カリブ海が砂糖生産に適した気象条件であったことから、17、18世紀にイギリス、フランスなどが島を植民地にし、今日見られるような多数の小さな国になったことによる。土着民が急速に減少したばかりに、宗主国は労働力としてアフリカから黒人奴隸を連れてきた。そして黒人はプランテーション型の砂糖農園で強制的に働かされた。白人数が少なかったので、黒人の比率がどうしても高くなり、現在多くの国で9割前後を占めている。黒人奴隸は身一つで故郷から何も持ってくることを許されなかったが、文化だけは雇い主の白人も消し去ることはできなかったようで、ここではアフリカ文化の影響を強く受け、ヨーロッパ文化・キリスト教との間で混淆が進み、クレオール化現象が起こった。この新たに生まれた混淆文化はこの地域特有のもので、人種的偏見はアメリカ合衆国と比べて概して小さい。この点ではブラジル社会はカリブ世界に近いところがある。

このように同じラテンアメリカ・カリブ世界は一括りに語ることは難しく、多様性に富んだ世界である。

付論 新興国によるカリブ海の島の争奪

ヨーロッパの新興国は、16世紀になると「新大陸」で植民地の獲得に乗り出すが、スペインの防衛が手薄で実質的に領有を放棄した状態にあったカリブ海の小さな島々で熾烈な戦いを繰り返した。その島がどの国のものになるかは、ヨーロッパの戦争の影響を受け、将棋の駒のように取ったり取られたりした。

*印は現在独立国。セントクリストファーとネーヴィスは一つの国になった。

[イギリス]は、17世紀になると「西インド諸島」、南米北岸ではガイアナへの植民を始めた。最初に関心を持った島は1624年に植民したセントキツで、1625年にはバルバドス*に入った。この島は1527年から本格的な植民が始まり、奴隸取引の中心地になり、最初はタバコの栽培、その後プランテーション方式で砂糖を生産した。こうした経緯からバルバドスは今でもこの地域で政治的に重きをなしている。同じ時期にネーヴィス*、アンティグア*、モントセラト、アンギラ、バハマ*の各島も領有した。トバゴ*島は、「新大陸」への海路にあることから何度もオランダ、フランス、イギリスなどの間で奪い合いになったが、最終的に1814年の「パリ条約」^(注1)でイギリス領になり、1889年にトリニダード*に統合された。そのトリニダード島は1770年代からフランス系移民が増えていたものの、1797年からイギリスの植民地になって、1802年3月の「アミアンの和約」^(注2)でスペインから領有を認められた。また1642年に始まった「清教徒革命」で誕生した共和政の護国卿オリバー・クロムウェルが1655年にジャマイカ*の島を占拠し砂糖の島になった。

(注1) この「パリ条約」は、島流しにされたエルバ島からナポレオンがパリに舞い戻っていた時の1814年5月に王制復古していたルイ一八世(治1814-1824)と反ナポレオン同盟軍との間で講和され条約である。

(注2) 「アミアンの和約」とは、1799年11月のクーデタによりフランスでナポレオン中心の政治が始まり、フランスが1801年2月に第二次対仏大同盟のオーストリアと「リュネヴィルの和約」を結んだ後、1802年3月にイギリスと結んだ講和条約である。

[フランス]は、リシュリュー宰相がよく補佐していたルイ一三世(治1610-1643)の時代にサンクリストフ島(=セントクリストファー*島)にピエール・ブラン・デナムビュックが上陸した。この島には既にイングランドの船乗りが上陸していたので(大峰2022p.242)二分割統治になったが、「ユトレヒト条約(1713年)」で英領セントキツ*になった。1635年にマルティニクとグアドループを植民地にし、すぐにプランテーション方式で年季奉公人や黒人奴隸を使って砂糖を作り始めた。サント・リシュリュー島(セントルシア*に名が変わり、1814年の「パリ条約」で英領に)、グレナダ*(「七年戦争」^(注3)を講和する1763年の英・仏・西間の「パリ条約」によって英領に)、サンマルタン島^(注4)などを植民地にした。英、仏が領有を争ったドミニカ*島とセントヴィンセント*島はフランス領になった(結局「七年戦争」後の「パリ条約(1763年)」でともに英領に)。

(注3) 神聖ローマ皇帝のカール六世が死没した後「オーストリア継承戦争」で、シュレジエン地方の領有が認められなかったマシア・テレジア(治1740-1780)は、その奪回を狙ってフランス

と同盟した。他方イギリスと結ぶプロイセンのフリードリヒ二世(治 1740-1786)は、フランスのルイ一五世(治 1715-1774)がオーストリアと同盟を結んだのに機先を制して 1756 年にザクセンに侵入して始まったのが「七年戦争」である。

英仏の戦いは主に海外植民地で行われ、フランスは講和する「パリ条約」で北米カナダとルイジアナの植民地を失った。残るは「西インド諸島」の一部を保持するのみで、フランスはこの戦争で「新大陸」の植民地獲得競争から実質的に脱落した。

(注 4) この伊豆大島ほどのサンマルタン島(蘭語ではシントマールテン島)は、オランダ人も入植し、1648 年に北部のフレンチ・サイド(フランスの海外自治体)と南部のダッチ・サイド(オランダ王国を構成する自治国)になるという、めずらしい島である。

他方フランス人の海賊バッカニアは 1600 年以前からエスパニョーラ島西部に住みつき、そこを追い出されると、1629-30 年にキューバ島との間にあるトルトゥガ島をねぐらにしてスペインの銀の輸送船や町を襲うなどカリブ海を荒らしまわった。このトルトゥガ島は、セントキツ島のフランス人ルヴァッスールの支配下に入って栄えた(ゴス 1994 pp.193-194)。1635 年にスペイン人により再征服されるものの 1659 年に取り戻し、再びエスパニョーラ島の西部に侵入し、タバコと砂糖黍を栽培した。そしてルイ一四世時代の「ライスワイク条約」^(注5)でスペインから仮領になった。それが砂糖で栄えたサンドマング(現在のハイチ*)である。

(注 5) 最強の軍事力を持ったルイ一四世は、積極的な領土拡大政策を進め、周辺国と何度も戦争になった。しかし「アウクスブルク同盟戦争」で敗北し、1697 年 9 月にフランスはイギリス、オランダ、スペインと「ライスワイク条約」を結んだ。

【オランダ】^(注6)は、1634 年にキュラソー島、アルバ島、ボネール島を占拠した。そしてキュラソー島をカリブ海の経済活動の基地、奴隸貿易・取引の中心地にした。シントマールテン島とサバ島も占領した。南米北岸のスリナム*もクロムウェルが始めた第二次英蘭戦争(1665-1667)を終結させる「ブレダ条約」でイギリスから領有権を得た。ここに入植したプロテスタントやユダヤ人が砂糖やその他の作物のプランテーションを作った。仮と蘭が領有を争ったシントエースタティウス島は 1675 年以降自由港としてオランダ商人の貨物集積港となつた。

(注 6) スペイン軍が 15 世紀後半からブリュージュに代わって栄えていた商業都市アントウェルペン(=アントワープ)を攻囲したので多くの商人や熟練職人が北ネーデルラント七州やドイツ、イギリス、スエーデン、中欧などに逃れた(キンドルバーガー 2002 pp.150-154)。彼らを受け入れたことでオランダは繁栄した。その中には 1492 年にスペインを追われたユダヤ人もいた。

【デンマーク】は、ヴァージン諸島の一角であるセント・トマス島を拓き、セント・ジョン島を領有し、1733 年にはセントクロイ島をフランスから購入した。ところが 1917 年にパナマ運河が開通した時に米国に売却した。現在の米領ヴァージン諸島である。

参照文献

- 東明彦(1984) 「ブラジル」 増田義郎・山田善郎・染田秀藤編 『ラテンアメリカ世界』、世界思想社。
- ウィリアムズ, エリック(川北稔訳)(1978) 『コロンブスからカストロまで I カリブ海域史, 1492-1969』、岩波書店。
- エリオット, ジョン・ハクスタブル(越智武臣・川北稔訳) (1975) 『旧世界と新世界 1492-1650』、岩波書店。
- 大峰真理(2022) 「一七世紀フランスの初期植民会社と小アンティル諸島」 荒川正晴・大黒俊二・小川幸司・木畠洋一・富谷至・中野聰・永原陽子・林佳世子・弘末雅士・安村直巳・吉澤誠一郎編 『世界史 14 南北アメリカ大陸～一七世紀』、岩波書店。
- オランダ, S・B・デ(マウリシオ・クレスポ訳)(1976) 『ブラジル人とは何か』、新世界社。
- キンドルバーガー, チャールズ P.(中島健二訳)(2002) 『経済大国興亡史 1500-1900 上』、岩波書店。
- 越川芳明(2022) 『カリブ海の黒い神々』、作品社。
- ゴス, フィリップ(朝比奈一郎訳)(1994) 『海賊の世界史』、リブロポート。
- コーディングリ, ディヴィッド(増田義郎監修、増田義郎・竹内和世訳)(2000) 『図説 海賊大全』、東洋書林。
- 近藤仁之(2011) 『ラテンアメリカ銀と近世資本主義』、行路社。
- 佐藤文則(2003) 『ダンシング・ヴードゥー ハイチを彩る精霊たち』、凱風社。
- 鈴木茂(2014) 「「黒い積み荷」の往還」 歴史学研究会編 『資料から考える 世界史 20 講』、岩波書店。
- 住田育法(2022) 「ブラジルの起源を探る」 小池洋一・子安昭子・田村梨花編 『ブラジルの社会思想』、現代企画室。
- 田尻鉄也(1999) 『ブラジル社会の歴史物語』、日本マーケティング教育センター。
- 旦敬介(2022) 「アフリカ人奴隸」 伊藤秋仁・岸和田仁編著 『ブラジルの歴史を知るための 50 章』、明石書店。
- 長嶋佳子(1991) 「奴隸たちの世界」 石塚道子編 『カリブ海世界』、世界思想社。
- 中村隆之(2017) 「古くて新しいクレオール」 国本伊代編 『カリブ海世界を知るための 70 章』、明石書店。
- フレイレ, ジルベルト(鈴木茂訳)(2005) 『大邸宅と奴隸小屋』、日本経済評論社。
- ベイリン, バーナード(和田光弘・森丈夫訳)(2007) 『アトランティック・ヒストリー』、名古屋大学出版会。
- ペンローズ, ボイス(荒尾克己訳)(1985) 『大航海時代 旅と発見の二世紀』、筑摩書房。
- 増田義郎(1989) 『略奪の海 カリブ』、岩波書店。

- 松本八重子(2017) 「アフロカリブ海世界」 国本伊代編 『カリブ海世界を知るための70章』、明石書店。
- 三田千代子(2022) 「ブラジルの新たな民族の形成」 小池洋一・子安昭子・田村梨花編 『ブラジルの社会思想』、現代企画室。
- ミンツ, シドニー・W(川北稔・和田光弘訳)(1988) 『甘さの権力—砂糖が語る近代史』、平凡社。
- メジャフェ, R.(清水透訳)(1979) 『ラテンアメリカと奴隸制』、岩波書店。
- 安村直己 (2022) 「南北アメリカ大陸から見た世界史」 荒川正晴・大黒俊二・小川幸司・木畠洋一・富谷至・中野聰・永原陽子・林佳世子・弘末雅士・安村直己・吉澤誠一郎編 『世界史 14 南北アメリカ大陸~一七世紀』、岩波書店。
- 山田睦夫・鈴木茂編(2022) 『ブラジル史』、山川出版社。
- 渡邊利夫(2021) 『国際政治のなかの中南米史』、彩流社。